

第十七号 八月十六日發行

東大斗争 獄中書簡集

「運動終り！」

終りだつて？

何が終りなのだ。

斗いは始まつたばかりじやないか。

本当の斗いは
これからじやないか。

曰

次

一、七月一八日	東 拘 より	大阪拘置所より	福本 敏(理共斗) :	一
二、七月二二日	東 拘 より	西谷 降士(仮名) :	二	
三、七月一八日	東 拘 より	野末 隆夫(広大) :	四	
四、七月九日	小 菅 より	長谷 耕二(仮名) :	五	
五、七月二三日	東 拘 より	小田 忠良(仮名) :	八	
六、七月二八日	東 拘 より	任(仮名) :	十二	

七月一八日 東拘より

福本 敏

69年夏30分間のための斗争宣言（ヘンリ・ミラー風に）

「運動！」ふうん、何のための運動だ、健康で文化的な最低の生活保障！。シリップをびたびたならして光の中へ出る。そだ僕は暗渠の中に幽房されている。だから光は僕のためにあるに違いない。一億五千万キロメートル彼方からあえてやつてきた光たちよ、君たちは素晴らしい平等主義だ。僕は又猫の類のような仮設運動場に押し込められる。敗者から勝者へ。死んだように生きてきたスタクローギンまがいのこの俺様とそちら一面の無機物たちと。暑いぜ。銀杏がどんなにじやましようと僕は光たちと出会う。一年前もこんな風に集会に参加していたろうか。シャツを脱いで上半身裸だ。汗腺がおうように活動を開始する。僕は準備運動を始める。でも余まり暑いので準備運動を始めるのはこの僕かそれとも他者か分らないのだ。主語喪失症！そうだ僕はかなり前から言語障害にかかる。自覚症状は：：ああ、あれはひんやりとした地下室の密会のときからだ。誰との？誰との準備運動かというようなことはどうでもよい。僕の関心事は僕の上腕筋と三角筋がヘラ・タレスみたいにくましくなるかどうかだ。それで僕は腕を回したり側屈をしたり。無意味だ。あの5畳の坪の向うの新築中のビルの足場から落っこちる労働者を助けられるほどでなければ。そうなんだ、日がかんかんと照つているから二人や三人の犠牲者はど

うでもいいのだ。空も汚れた青さをしている。空へむかつてとびあがればあの坪なんか越せるかも知れない。そのため今日まで足を上げる訓練をしてきたのだから。金網を越えて走り出したら坪のそばを退屈そうに睡つたまま一歩いている看守は眼鏡を落してうろうろするだらうか。そしたら僕は眼鏡を拾つてやろう。

何んと立派なスポーツマンシップだ！僕は直立不動で勲章をさずかるだらう。でも看守がよそみしているから僕は仕方なく腕立てふせをする。全ての分泌腺は開放された。心臓は需要過多で企画室も大あわてだ。毛穴から空が見える。一回、もう僕はやめることばかり考えている。目の前のあの兵隊あるいは民主青年同盟員に違いない。二回。腹に土がつく。魚河岸の捨てられたまぐろみたいだ。三回。僕の筋肉は僕をささえるに十分でない。四回。あの時もう少し早く逃げればよかつた。五回。そうすれば今頃朝寝の最中だ。六回。どうして逮まつたんだ？七回。私服の巡査部長二人がかりだ。八回。彼らは日本の公安をしょつて立つ直角的なやつらだ。九回。あのうちの一人はきっと男色家だ。十回。狡かつそうな眼をした方だ。十一回。いつしょに逮まつた赤十字の腕章をした女の子はどうなつたろう。十二回。腿がふるえている。

十三回。僕は彼女たちが汚辱されないことを祈つてきたのだ。十四回。いや。きれいごとを云うのはよそう。十五回。出来るところなら僕は強姦しかつたのだ。鈴木志郎康みたいに。十六回。彼女たちのうちの一人はグルーシエンカみたいだつた。十七回。僕は映画のパンフを差し入れてもらつて確めたのだから。十八回。もう耐えきれない。腕立てふせもここに入れられているのも。

黙つてゐるもの。十九回。屈服しようぜ。二十回。でも一体何に？二十一回。十年挨手榴弾をなげるかも知れないとの腕のために。二十二回。えつ／それはおかしいじやないか。暑くては何もかもおかしいさ。二十三回目僕は華やかに転落する。奈落の底へ。じめじめして不快だ、全く。

僕は立ち上つて息を吸う。思えば大都会のド真中だ。僕がよく昼寝に出かけた荒川の土堤とは違う。若いといふ字は苦しい字に似てる。拘は狗に似てるわ。拙者は靴下ボールを投げるぞ。大分コントロールがよくなつた。コントロール？産児制限？イン

ンドもピアフラも餓飢者で一杯を／僕は閉じこめられて食わされている。毎食残飯だらけだ。で、奇妙に僕は元気だ。ちょうど50球なげよう。左投げのエースだ。数学学者や詩人になろうと思つてゐる。野球選手になろうと思つていた位だ。でも実に奇妙だ。ビルの足場からこちら見れば。金網がびんびん鳴る。隣でも、その隣でも。皆静かに投げているのだろうか。あんまりにも暑いからくたばつたのか。金網をぐぐりぬけてモンシロチヨウが飛んでくる。ひらひら。君は死にたえなかつたのだネ。君は身軽だ。君は熱いトタン板をくるつとよける。君はどこから来たんだい。君はどこへ行くんだい。遠まらないようにしろよ。逮まつたら裁判なしに死刑だから。君の鱗粉は僕のあことがれだから。内臓が踊り出す。あえいでいるのは光たちではなくてこの俺だ。霜柱のおりにグランド以来あえいでいるのはこの俺だ。目がまわりそうだ。吐き気がする。新橋のヌード劇場以来だ／陰茎がブルンブルンしている。汗でびつしよりだ。ぬるぬ

るしてゐる。反道徳の空間へ。全てが破碎される空間へ。そうだデイジーも枯れかけている。泣き言なんかいわずに出発しよう。ワゴンの上には牛たちが……あ、あれは牛ではないのだ。悲しみぬいた人たちだよ。トタンの中でもし焼されるのを拒否しよう。ミンチにされるのを拒否しよう。「運動終り！」終りだつて？何が終りなのだ。斗いは始まつたばかりじやないか。本当の斗いはこれからじやないか。（スリッパをびたびたならして暗渠に帰る。我どぶねずみの如し。）

七月二二日 大阪拘置所

西 谷 隆 士

「獄中書簡集」を読み、獄中の同志諸君の元気を姿を心強く思つてゐます。半年以上にも及ぶ長期拘留、獄中でのあらゆる自由

のはく奪、連日の欠席裁判の強行など権力の攻撃がきちがいじみたものになればなるほど、東大斗争の階級的意義がよくつきりと浮びあがつてくるだけではなく。獄中の我々にとつても権力に対する憎悪、更なる斗いへの決意が燃えあがつてくるのを感じます。

権力から社会的死を強制され、分断されている情況を打ち破り、獄外との、更に獄中内部の生きた交通を確保するための武器として、「獄中書簡集」を有効に活用する必要があらうかと思います。先日、久保井全学連副委員長にも破防法が適用された事を知りました。ブント・中核への破防法の適用は、革命組織そのものの破壊を狙つたものとして、これまでの弾圧とは質的に異つた本格

的な弾圧として抱える必要があるでしょう。トロツキーが指摘するように、「ファシズムの本質は、あらゆる労働者組織、革命組織の破壊にある」としたら、破防法攻撃は、70年安保→70年代階級斗争にむけた支配階級の先制攻撃であり、上からのファシズムの前触れともいいうべきものと考えられます。このようないくつかの攻撃は当然にも、合法、非法活動を駆使しうる組織の建設を日程にのばしており、それは又、「ぼう大な大衆に踏みつぶされ、取り残されないため」（レーニン）にも実践的に必要とされているというべきです。10号をつたかで、解放派の人々がレーニン主義を批判して、行動委員会運動なるものを云つていました。が、これは全く自然発生性に拝跪した議論といふものです。

党がなくてソヴェートができると考へるなら、これは当然にもドイツ革命の敗北の二の舞を繰り返すが、その縮少再生産に終るだけでしょう。蜂起は、ソヴェートや大衆組織一般が行うものではなくて党に指導されなければならない。とはレーニンも何度も主張している通りです。もつとも、社民の内部で共産主義分派を自負しながらいつの間にか（とりわけ最近は特に）社民化してしまつた諸君にこんな事を説教しても無駄かもしけませんが……。

ついでに、11号だつたと思うが革マルの人が、相も変わぬ無内容な「改良斗争の革命的推進」なる御託をふりまわしていたけれど、その内容を展開しないことには何のことやらさっぱりわからない。何でも、上に「革命的」とくつければ、まるで魔法の杖の如く、たちまち「革命的」になるとでも思つてゐる

のだから世話はない。東大斗争から逃亡し、大衆から「のりこえ」も更に右派として登場している諸君が「革命主義反対、武斗反対」と叫ぼうと勝手だが、50年代、60年代の遺物たる改良主義、自由主義にいくら反帝反スタをくつつけたところで事態は何らかわからぬといふことは云つておきたい。

さて、先日の報道によると、文部省の調べでも、占拠、封鎖中の大学は71校あり、とりわけ3月以降急速に増加したとのことです。大学斗争の收拾策たる大学治安立法が逆に新たな斗争の「火だね」となつた、と新聞では云つていますが、そらそら喜んではかりはいられないでしょう。今や大学斗争はどんな御立派な改革案が出ようと日共を利用しようとそれ 자체の解決はない段階にきてはいると云つていい。いわば、斗争が一人歩きしているわけだけれども、それだけにその方向はますます全体の政治的ヘゴモニーによつて大きく左右されるだろうということができます。

11月佐藤訪米→安保決戦の斗いが、今後的一切を決定するといつても決して過言ではないと思ひます。ところで、この決戦的斗争に、我々は果して参加できるだろうか、という疑問が頭をかすめます。現在の状況では否定的にならざるをえません。だが、その時は、獄中から斗いの火の手をあげる事が我々の任務となるでしょう。「東拘を、小菅を、府中、中野を、日本のバステイユとせよ！」を合言葉に……。同志諸君、ともに斗おう！

七月一八日 東拘より

野末 隆夫

前略
連日、姿^{シマハ}の荒波の中で、持続する意志を身でもつて実践している同志かたがたへ敬意を表するとともに、ぼくら獄中あるものもいよいよつて闘志を燃やし続けて暑い夏を熱い夏にするべくがんばります。

「七月四日発行」の書簡集を手にして、どうしても一言いいたいことを感じ、ペンをとりました。

(1) 名前が例の如く消されているので不便ですが、予備校へ通つている人のことばの中に、彼一人の特殊なもんだいではなく、ほとんどの人が感じているに違いないであろう苦悩を見る。

「東大斗争に涙を流し感激し、強い憎しみをいたいた私が、現在下宿と予備校との精神的には单调なる日々を送つてゐる」という事は、松浦さんの言われるように自己に対する裏切りであります。

ぼくは今こそ、権力に奪われた犠牲者[”]といふ体裁のいい名の下にナボタージュをきめ込んでいる。金の余裕がないので一浪して国立一万二千円大学へ入るまでは、受験勉強などといふくだらないものはしたくないと心中ののくりながらも毎日机の前に向かわせるといった生活を送つた。社会への反発、大人への不信、世の中を知らないというキライはあるにせよ、自分でできそうな仕事を夢想し、大学へ行けばそれが成しとげられるものだと思い込んでいた。実際そう思い込むことによつてな

んともみじめな自分の毎日をそれ自身自己化したかつた。他の一切のものを犠牲にしてなんとわ一萬三千円大学へ入らなければ、というせつぱつまつた生活が一転して、少なくとも受験勉強から解放されたのが大学入学。と同時に他のぼくを束縛していたものからも解き放たれ、現象事物の様を比較的の自由に見、考えるようになり、機動隊員に“お前なぐつをな”とおどされ、けつられなぐられすることなどを媒介として階級斗争の何たるかが肌身で理解するようになつて……東大入試粉碎に至る……。

ぼくは自らの手で（最終的に？）粉碎した入試を過去目的としていた。今後も入試粉碎のために活動する。だからどうしても過去自分のやつたことと現在自分のやつてゐることとの間の矛盾——あの予備校の感じたジレンマを解決しないわけにはいかない。といつてもさしあたつての解決策は残余ながら手元にはない。

矛盾しながらも今のぼくの生活を続けるしかない。無責任だと責められようが、今のぼくには、東大斗争に共感をもちながら受験をめざして日夜うつとおしいふつきれなさに身心をまかしている諸君にかけることばを知らない。受験勉強ナンセンスだから止めるとはとても君たちに向かつて言えないと、かといつて大学当局に入試実施を認めることもできない。

ぼくはせめて次のようにいいたい。今の（中途半端な者ではあるが）叛逆者たちとともに帝国主義大学を解体し、ブルジョアの真理の府ではなくプロレタリアのための破壊の府——安保粉碎・日帝打倒の砦^一を一日も早く現出させ、どのような人もが自由にキャンパスを利用できるようなものを創つていく。諸君達は物質

的精神的諸条件が許容するに至つた地点でそこから脱出しほくらと合流しよう。

七月九日 小菅より

(具体的に今考えられるスローガンとしては「卒業資格制度撤

廃・入試廃止」一個別的にはなく全国的に一即ちそれは社会革命をひき起すものとなる構想を貫徹していきたい。)

飛躍をめざして日常から少しづつでも準備していきたいと考えています。

(2) 今後の分離公判・欠席裁判強行に対して、対抗裁判というはどうだろう。対抗講義というのがあるように、東京地裁が狂気のあまり統一公判を認めないという悪態をどうしようもないといふなら、ぼくらは模範裁判を(人民裁判)してみせてやろうじゃないか。欠席判決をデツチ上げることは権力とつても双刀の剣ではあるが、それにとどめをさす決め手が何か必要だ。分割公判審理には一切応じないで(出廷拒否は保証される)と難しいが、法廷で裸になるとか寝ころぶとかして審理に応じをいようとする)仮判事、仮剣事をしたて後は実際の公判と同じ要領でやればいい。もちろん宏大な宣伝の要はあるけど。とにかく欠席裁判を権力の手から引き出し暴露した以上、決定的な攻撃の手が必要だ。

獄中にあるヒマ人よ、ない智恵をここでしぶり出せ。

長 谷 耕 二

統一救対殿。ようやく、公判斗争の第一段階に入つたようですので、本日は、若干、僕個人の公判についての意見を述べて、公判斗争の指向性を定めてみたい。それにつけても、次の点は、やはり、原則として、確認しておきたい。

(i) どこまでも階級斗争の一環であつて、それと無関係に独立して考えるような傾向は、まったくナンセンスであること。

(ii) したがつて、統一公判獲得というのは、あくまでも、七項目要求と同様な意味をもつのであつて、それ以外は、僕達にとって意味をもたないだらうということ。

獄中書簡なんか読んでもみると、統一公判獲得を物神化して、それまでの過程としての現在において、如何に階級的にこの斗争を革命化してゆくかという視点が見られないのは残念である。(特に東大の諸君には)一僕達(外人部隊II国際旅団)にとつて、「統一公判を獲得して、加藤^{etc}を引きずり出し、東大斗争(個別斗争)の意義を明らかにしてゆく……。」というようなことは、あまり興味がないのであつて(失礼)、意味あるのは、現在の階級情勢の中に如何にそれを位置付けて、敵との攻防を開いてゆくのか、(II現在)、そして70年、と70年代階級斗争に勝利する(プロ独立)のかということであると思うのです。逆に言うとたとえ統一公判獲得したとしても、その公判は、大した意味をもたないだらう(敵のヘゲモニーの下で為されるという意味で)と思ひますし、

直訴すれば、敗北であろうと僕には思われます。もう少し言へますと、現在（今秋の十・二一以降の安保決戦を控えた現在）は、そんなに甘い情勢ではないということであつて、僕達にとって、当面の公判斗争の相手は、地裁権力のみならず、階級攻防戦上の「司法権」そのものであつて、絶対にこれと対決して、ガタつかせる必要があるということです。秋の中央権力斗争に向けての期間は、攻防の関係は、こちら側にヘグモニーがあるのであつて、すなわち、今や敵は、十・二一以降の攻撃に如何に対処するのかといふ局面であつて、この日々の攻防戦（スペイ戦、大衆操作戦^{etc}）は、非常に激しい。したがつて、我々の公判斗争も、それに合わせて、そのヘグモニーを奪還して、もつと、もつと、わい小な地裁権力を追撃してゆくといつた局面を目的意識的に追求してゆかねばならないのではないかと思います。攻防戦の土俵をこちら側の有利な方向にずらしてゆくべきです。「統一公判、話し合いで妥結！」というのでは、まつたく、まずい。非和解性を根として、大衆的に権力に肉迫するという感じは、最低限必要だと思ひます。一言すれば、統一公判獲得斗争の過程で、如何に大衆を斗争主体に組み込んで、権力との対峙関係を形成してゆくのかということです。（今のところ、うまくいつていると思いますが、これからが本番だと思ひますから、息切れしないよう頼みますね。）このことは、対に高度な指導性が要求されるのであって、従来の全共斗指導部の延長線上に低迷するようだと、ちよつと担心のない感じもします。もちろん、僕達も、制約を受けながらも領導してゆ

くつもりです。以上、当然なことを書いたのは、全ての諸君に確認してもらいたかつたからです。個別・全体という視点から、全体・個別という視点へ、さらに全体・個別へ、出来るだけ早く東大の諸君に移つてもらいたい。ノンセクトかセクトかの議論は、誤解を恐れずに言えば、僕達にとつて興味がない。これは、はつきり宣言しておくるのが、僕達は、決して、東大斗争を支援に来たのではなくて、東大に、革命をするためにまつてきたんだといううことを、東大の諸君は知つてゐるのだろうか。我々がなおも、大量の勾留者として、ここに存在するのは、諸君が飛躍することを願つてであり、逆に言えば、領導しなければならないということだからです。獄中書簡へ、中核派の諸君が、最近、投稿し出しましたが、そういう面からの革マル、反帝への批判が行間にあるのではないかと思ひます。僕ら、外人部隊に投稿を依頼してくれているようですが、どうも違和感があつて、出しにくいつつあります。中核派の諸君が、だいぶ投稿し出したので柔らかくされたのですが、失敬だけれども、獄中書簡は確かにおもしろいのですが、僕らにとつて、あのような文面でやり合つてゐるものです。僕らにとつて、あのような文面でやり合つてゐるものです。僕らにとつて、あのような文面でやり合つてゐるものです。僕らにとつて、あのような文面でやり合つてゐるものです。僕達にとつて、反スタ観念論者（リバリスト）、青年ヘーゲリアンと、中核、M・Lとは、やはり、一線を画する。チヨツ、ゲバラ苦に對して、ちよつと一言しておきます。「初期のレーニン」とは、初耳だが、多分「何をなすべきか」あたりを指すと思うのだけれども、君達が考へてゐるように単純でもないし、ましてや、單なる「外部注入論」でもない。君達の先輩、広

松浦ついでに言えば、藤本進治に目を通して、もう一度、マルクス、レーニンをじっくり読み直して欲しい。（良い機会だから）意地悪い、質問だろうけれども「今秋斗うのか斗わないのか？」斗わないのなら、それでいいだが……せいぜい旧三派の面目をつぶさないように、学生解放派の諸君は、第二戦線を維持して欲しい。（君達の運動組織論⁽²⁾では、絶対に第一戦では斗えないと思うから。）感性的自立⁽³⁾を主張するのもいいけれども、ノンボリと区別して、セクトを称するなら、もう日和らないでもらいたい。中核派の諸君へちょっと一言、「先日の『前進』紙上の“ブント諸君へ”という論稿を読ませてもらつたのですが、中核派らしくないと思う一方、やはり中核派（タメ息）と思い、結じて、ちょっと失望した……。それから、本多さんの一二〇〇円也というシロモノがドヒヤーと入つてきたのは、ちょっとショックだつたよ。ウンホント。

再び、救対殿へ。現状況を固定化する傾向から、左翼日和見主義と簡単にかたづけてよいものかどうか。法廷を考えておられるようだけれども、その段階に入つたら、ほとんど決着がついてしまつてゐるのではないか。現在こそ、現在の斗いこそ、後を制す。僕達は、統一公判を獲得するために、広範な、大衆斗争を組むのではない。決して、大衆を大衆のままで、市民運動に收レンさせてはならない。やはり、今から、大胆に暴露してゆくべきだと思う。急（変な時）にハネるのはよくない。やはり、プロがブルかであつて、小ブル中間層は、分解させなければならない。今や、階級攻防戦は、その段階に入つてゐる。

断固原則を貫徹した、公判斗争をやり抜きたい!!。何よりも、秋を目ざし、そして70年を、

解放派、反帝学評の諸君へ、なるほど、君達は、今日の市民社会のアトム化分断状況の個人の隸属化を抱えて（頭の中で）斗いを通じて、互いに他を制約する共同関係とかをおつしやつている。又「自立した（個人の團結」とおつしやり、プロレタリア・コンプレツクスまるだしの小ブル的な、「生き生きした・」とかのキレイな修飾語を付していらつしやる。アジとお考えなら、「それも、小ブルに対する」結構です。しかし、そんなことで、大衆は動くのだろうか。（君達自身もだよ）否、却つて、もうウンザリしているのではないか。大衆へ、大衆へとおつしやるが、その実、大衆の桎梏になつてゐるのではないか。はつきり言おう！君達の言う、大衆は既に動き出している。動こうとしている。彼等にとつて必要なのは「どこへ？どう？」を示してくれるものなのだ。プロレタリアは、そういう小ブルのオシャベリはうんざりだ。そういうコンプレツクスめいた、アゲツライなんか、たくさんだ！君達が、何千回、何万回、ワメこうが、市民社会を解釈して嘆くのでは、万事変わらない。せいぜい君達は、プロレタリアの尻を追つかけて、インタビューやをするがよい。そして小ブルに向けて、キレイなコトバを放送するがよい。そうすれば、頭の中で、革命は出来ると思うよ。現実がいつか変わるからね。しかし、「疎外された社会」を類を奪還した⁽²⁾新しい共同体が、君達が夢想したものと違つたからと言つて、ヒステリックに叫んだつて、そこまではメンドウを

見ないよ。どこかの「反スク」の人達が、「こりやあ、革命じやない」とおつしやると同様に……。レーニンをスターリニズムの芽だとおつしやつて、恥ずかしくもなく、即目的に反発していらっしゃる。「反スク」論者がスターリンにそうであると同様に……。そうしている間は、決して、現実に関わることは出来ないし、ましてやそこに存在する内的矛盾を開いて、止揚することは、いつまでも、永遠に出来ないとと思うよ。現実に、スターリンが存在したように、スターリニズムは存在しているのだよ。ローザ主義者よろしく、又、マルクス主義よろしく、「初期マルクスが展開した疎外論が一貫している。」とかおつしゃつて、マルクスを「マルクス主義」へ陳しておられるようだが、「あの予言者マルクスが、「そこにプロレタリアの闘いがある限りそれを支持し共に闘う」という信念と共に、世界恐慌の到来を予言し、やつて来ない世界恐慌と、やつてくる筈の世界恐慌を信じて闘い死んでいく革命家達との間で、神経症に犯されつつ狂い死んでいつた」というその情念を継承しつつ闘う革命家としてのマルクス主義者達と無縁ではないのか。逆説的に言えば、僕達は、君達以上にローザを評価している。何のために革命をし、如何、現在、命を賭けて闘うのかもう一度自己を対的に位置付けて欲しい。現実は「思考が現実に向かつて突き進むだけでは足りない。現実が自ら思考にまでつき進んでいた」激しい階級斗争の場であり、より激しい党派斗争の場なのだ。君達に提起してもらいたいのは、何よりも、革命の権力問題を内包したところの戦略戦術論だ。「生進国同時革命」「ブ

ロ統一戦線」と主張したところで、それは、かけ声にすぎないのではないか。「現実の市民社会、ブルジョアイデオロギーの内にあつては、個々のプロレタリアは個人としての歴史的規定性をもち、それは彼自身の所有している労働力商品以外の私有財産と結合する事によつて、他の人間と異なる生活実体を彼の実在として作り出し、物質的諸関係の総体としての彼は、そこでは現象的には、あくまでも個人としての社会的諸関係のうちに生きる……。

この事は彼がプロレタリアであることが、彼が変革主体として措定されるということであつても、無媒介的に彼が革命的であるとは見えられない。」このことは、帝国主義段階にある今日、なかんずく、国独資と言われ、文字通り、ブルジョアジーが階級として、指導する。指導される存在としてのプロレタリア（プロレタリアートではない）となつてゐる「革命か反革命か」たる激動の70年代に向けた現在、そのような、プロレタリアの内的矛盾の展開は、「何らかの外在する要素」すなわち、内的矛盾を開し、さらに発展させる。その「媒介を果たすもの」「党を必要としていることを意味する。君達の「生産過程において疎外された労働を働く労働者は、その疎外された労働そのものを物質的根拠とする感性的自覺（＝直感）に基づいて革命的自覺をとける」という疎外革命論の論理のあやまりは、これに無自覚。

最後に社学同の同志諸君、ブル新の伝えるところによると、激しい内ゲバをやつしているとのこと、又、同盟議長がパクられたらしいが、決して動搖することなく、それほど厳しい現実をみつめ原則のある闘争を担おう。決して口舌の徒たらんとしない多くの

の同志達に対し、許しを願つて……。

P・S 僕は獄中書簡集第9号のスンテキ白土三平の「影」について書いていた同志が評しているように「関西からの部隊にはノンボリに近い部分が多かつたが……」という中の一人で、こういうシロモノを出すのか出さないのか、大へん迷いました。なによりも、同志から、ドカツとこられるのではないか……。つまり、「社ガキ同」（東京においては、「血走りブント」と言うらしいですが）と思われるのが……。しかし、同志諸君!! 「組織された暴力」と「プロレタリア國際主義」の社学同の旗だけは堅持していることを宣し、今後も、この真紅の旗の下で斗うことと誓う!!

「世界II一国同時革命//暴力革命//プロレタリア独裁//」

七月二三日 東拘より

小田忠良

第13号の最底の文の筆者に對して少し意味を述べて見たいと思ひます。

筆者は各所づいぶんと一面的です。現実と對する感性づいぶん優秀な様ですが、實際の運動の組織的立場が全く欠落しています。もつとも「ぼくは自分の考え方で人を動かすのはいや」で「戦略は良く知らない」そのので、こんなことは全然問題にならないのかも知れません。ちよつと急ぎすぎる様です。はじ

めからちゃんと書きましょう。

「イデオロギーの人間支配が前提されている。ヘーゲルを転倒させたのは誰だつたか？」と筆者は述べています。それは「大学闘争は帝国主義とスターリン主義の虚偽のイデオロギーの支配に対する人間回復の闘い。マルクス主義の回復の闘い」というのに対してむけられている、筆者は「水におぼれない様にと重力の思想と闘う“感心なドイツ人”」を思い出しています。

さて筆者は重大な事を忘れてはいる。第一に、イデオロギーの支配が全く存在しないと空想している。

第二に理論は実践を規準にして批判されるということを。正に、「革命的理論なしに革命的実践はあり得ない。」そしてそれは又、革命的実践のない理論は革命的理論ではない。」ということでもあるのです。

マルクスは言つています。「ぼく達は全てのイデオロギー、宗教から自らを解放しよう。」何故彼がそう言わなければならなかつたのか。そしてぼく達が今だにそれを言わなければならないのか。現象はどうだらうか、見て判るとおりブル新のキヤンペーンは一定に成功している。大衆はおそろしい圧迫を感じ不満を感じながら、一定程度の「秩序派」となつてゐる。「理性と學問の府」「大学の自治を守れ！」これが平和時に於いて何と有効だつたとか。資本主義的人間關係は悪・暴力・不正を生み出し奴隸制を普遍化する。このことは、一度は闘いを決意した学友が、せつせと勉強を始め大学院をめざしていることに、あるいは労組の社民指導部の墮落にも表現されている通りです。

ぼくたちは資本主義社会の中で、多くの抑圧を感じ、そして耐えられなくなつて闘うのだけれども、やはりブルジョワ社会の一定のエサ「奴隸でさえあれば普通の生活が出来る」といつたユーワクから完全に解放されていたとは言えないだろう。例えは、警察で刑事と遂に一言も口をきかなかつたという人は何人いるだろうか。

さて、資本主義社会の奴隸的人間関係を断ち切る、そして「他者との関係を人間的な関係として形成する」ということはどういう事でしょうか。資本主義的社會關係の中では世界的行為としてこれは不可能です。それは「血を吹く様な生命活動」であるし、この行為は資本主義の中ではサークル主義へおち入り、自己満足的な作業に終つてしまふ危険性を多大に含んでいます。資本主義的奴隸關係を断ち切るということは資本主義的人間關係の徹底的な破壊、資本主義機構の破壊を通してのみ可能であるという事はいうまでもないでしょう。ぼく達が「革命の立場に立つ」という時、それは奴隸的人間關係を破壊し、それを通じて自己を解放し全人民を解放する為に意識した部分と共に不斷に労働者階級に革命を準備させる為に闘う事であるのです。「他者との関係を人間的な関係として形成する」ことは「力関係の変化」を自己確認した所で替るものではないのです。大衆は戦争を望まないと同様に革命も望まない。しかし一たん革命的激動のあらしの中に立てば「革命的ロマンチスト」に渡つてしまふのである。ぼくたちの闘いが奴隸的人間關係の中で多くの不満を感じている部分に対して、その前に資本主義的

社会關係を一枚一枚ひきはがすとともに、随所で戦闘的な最良の部分をまき込んだ闘いをまきおこし帝国主義に対する打撃を与えたことに對して、筆者はどの様に感じるのでしょうか。佐世保の闘いは庄倒的大衆をまき込んで斗れた実力闘争においてはじめた解除」をせまつた人達によつて闘れたのではないし、「小ブル宗派」などと泣き呼びながら革命的プロツクを破壊し右翼的に対応しつつ遂に「必然的に」「内ゲバ」を行い、消耗し東大闘争をビンチに追い込んだのは謹だつたでしょうか。

「大学の破壊、安保粉碎、日帝打倒の砦に！」というスローガンは、自分が学生であること、研究者であること、それが必然的に奴隸關係から自由でなければならないとともに、よりいつそうその關係を強めているという自覺において始めて闘いとなる。筆者はこの書を「一面的」読んだらしく、例えば日大的学友のつかみとつを「秩序の維持が大学の破壊か」というスローガンが東大の現在の情況（機動隊大学・政治活動の全面禁止）の中での重苦しい不満の少數の活動家の闘いと、庄倒的な学友の帝国主義秩序の中での抑圧に対する反抗によつて、爆発した長い長い+〇〇〇人にのぼる逮捕者を出すという苦しい闘いの中で獲得されたことを忘れている。あの日大闘争が果して「自己と直接無関係な帝国主義の一般的な罪悪」人民の苦痛のために斗う」という構造だけであつても聞えるだろうか。一九六七年十月八日からの新しい激動、六年十一・二の量と質の闘い。大学闘争の臣大な爆発、四・二八を最も良く闘い指導して来たのは誰だつただろうか。「批判の規準

は実践である。」府中の隠居はこれを全く忘れ去つたが、彼の言葉は正しい。

精神労働と肉体労働が現実に分離されている事を忘れてはいけません。「精神的労働者」の予備軍として生き生きとした日々であつたろうか」という筆者は、それをすぐれた感性で「自分はこのブルジョワ社会では生き生きとしていけないと感受するところから本物の闘いがはじまります。」と言ひながら、精神労働者の予備軍であり、「大学の自治」という名の下に一定の自由を与えていたからこそ、それを他人より早く対象化することが出来たといふ事を忘れてはいる。そして「生き生き」と感じないながらも自分が闘わなかつた時の頃を思へ出すべきです。その「生き生き」していな「重苦しい」生活がいかに帝國主義的秩序」をささえ、自分を含めた圧倒的大衆を抑圧するに大きな役割を演じていたかを。そして筆者は「自分のための闘い」を主張するあまりに自分をめぐる支配関係を見ていない様です。このことはひどく危険を共なつています。筆者のこの一面的な読み方（わざと自己主体の部分を読まなかつたのか、それとも読めなかつたのか）はいずれにしろ、「精神的労働者」への「あこがれ」の裏返しにすぎません。これは「一般学生」諸君に対する「小ブルの滑稽で愚劣でだらしない姿」反省組の「残された道は大学院」の裏返しにすぎません。

さて、「産学協同」などといふのは現在大学が存在する以上絶対に止揚出来ないものであるでしょう。どの様に「いい」大学であろうとも「個別資本との結び付きがいつきしない（現

在の帝国主義段階の腐敗において、この様な状態にあると云ふことは考へられないが）研究室」であろうとも、その研究が発表され、あるいは大学を出るということ、それそのものが帝国主義段階における資本主義的関係から自由であると考へることは全くの空想にすぎません。このことを理解せずに「いい」大学「いい研究」を志向するということは改良主義、日和見主義の域を出ないのです。

「この人達」はあるいはこう反論するかも知れない。「国家権力を握らなければ結局何も出来ないのだ。」と、そうして彼らは國家権力によつて人間関係を変え人間を疊かにしてやろうといふのである。これは悪名高き二段階戦略以外の何ものでもない。』と筆者はいみじくも言つています。「この人達」の一人であると思われるぼくは次の事をいいたいのです。「国家は階級支配の機関であり、一つの階級による他の階級の抑圧の機関であり、階級の衝突を緩和しつゝ、この抑圧を合法化し強固なものにする「秩序」を創出するものである。」（レーニン国家と革命）そしてぼくらの任務は国家権力を掌握し、この「全国機関を粉碎し、うちくだき、爆破しなければならない。」（マルクス）それはとりもなおさずぼく達を抑圧し支配していく資本主義的社會關係の根底的な破壊であり、ぼく達が「個人の自由を發展が社會の發展と完全に一致する社會」へ到達する為の最初の一歩であるのです。革命運動といえども資本主義的支配から自由では全くありえません。勿論、言葉を言いかえることによつて「自由」を感じることの出来る人は、とつても「しあわせ」です。

さらにつけ加えるならば、ほくらは言うまでもなく国家機構をそのままにして権力掌握するなどということは一度も言つていません。

「旧い国家機構を新しい階級が粉碎し新しい機構の下で命令しそして、だれもがそれを行い、それは又だれも統治しない社会への移行」国家の揚棄への巨大な最初の一歩への不斷な闘いを、ほくらは行つて行こうと思うのです。それが革命でしよう。

「「革命の問題は権力の問題である」という事位は知つているつもりである。」と筆者はいつています。しかし国家問題の回避、階級的立場の揚棄、それは必然的に社民への転落を意味しています。何故ならばこの二点の回避は社民が社民であるに、とつて何よりも必要なことであるのですから。

ブルジョワ社会においては、そして特に帝国主義段階における腐敗した社会においては、「革命的拠点、すなわち人間解放の拠点はコンミューンだの労働者権力だの」というコトバとは無縁の血のにじむ闘いの連続を持つて防衛出来る。そしてその拠点を支点と巨大な闘いをまきおこして行くのである。

水におぼれない為には、水に近づかないのではなく、普段に

練習し、そしてある場合には泳ぎ方の手本を学ばなければならぬのであります。おぼれたやつを見て学ぶことも多大な成果を生むでしよう。

ところで話は換わりますが、先日書簡集（十三号）を読み、その中である学友の書かれた内容に疑問点がありますので、二、三書きたいと思います。元より基礎の明確でない僕が書くことですから、語謬があるとは思いますが、それはあくまで僕個人の責任としてもらいたいと思います。（勿論僕はN・Rではない。）

彼は、「批判しないでおくことは、精神の安定を欠く事になら」と言うことで、五ページ半に亘つて「大学斗争」を批判していくますが、その批判の前提となつてゐる「理論」に大きな誤りがあると思ひます。

七月二八日 東拘より

大西任

まず資本主義社会に対する認識の「不明確さ」。資本主義社会（彼の言葉で言えば「ブルジョア社会」）の規定が明確でないために、過渡期社会及び社会主義社会の一般的規定を明確にしえず、「個人的対立の止揚」（人間的結合が資本主義社会に於ても可能（例えば彼の一月東大斗争の理解の仕方）かのような言い方に陥つてしまつています。

資本主義社会の矛盾の根源は、労働力の商品化であり、資本主義社会の特殊な歴史的形態規定がそれであることは、誰でも承知のことです。労働力の商品化により資本は、全生産過程を把握し、歴史的に一社会たりうることになる訳です。つまり、労・資の階級対立として発展する資本主義社会は、発生期の商人資本による外からの封建社会の破壊によつて、封建的支配服従関係と土地（生産手段）とから自由になつた近代的無産労働者の大量的産出を前提として、労働力の商品化を基礎とする価値形成増殖過程によつて労働生産過程（経済原則とも言える。）を商品形態の内につつみ込み（ここに階級対立を「自由・平等」）を看板とする商品形態への隠ペイが生ずる）全ての使用価値を商品たらしめる訳です。かくして資本主義社会は、社会の存続の基礎を成す労働生産過程（経済原則）を、商品の価値法則をもつて規制するになる。ブルジョア社会の最奥の矛盾は「社会的隸属」だと言つても、内容を明確にしなければ、封建社会乃至古代社会との区別すら不明確になります。

このような曖昧さが「世界革命」過渡期社会の位置付けを欠落させることになり、社会主義社会の一般的規定をぼかし、單

に「個人的生活の対立」の止揚とか「個人的所有」をコトバとしてのみ語ることに終つてしまい、如何にすれば「個人的生活の対立」が止揚されるのかは説いていない。

商品経済を破棄し、労働力商品化を止揚するものとして、資本主義がいわば商品経済法則（価値法則）にまかせてやつてきたことを、社会主義は労働生産者の経済原則に基づく計画的自らの行動として行われなければならない。

かくて、「社会によつて生産手段が掌握されると共に商品生産は除外され、従つて又生産者に対する生産物の支配も除去される。社会的生産の内部に於ける無政府状態は計画的にして意識的な組織によつておきかえられる。……人が彼等自身の社会結合の主人となる。」（エングルス）

しかし、共産主義（第一段階の社会主義社会を含む）への移行には商品経済の残存する過渡期を通過しなければならない。

そして商品経済の完全な消滅による価値法則の作用の消滅を世界革命による世界市場の廃絶に求め、その為には、この過渡期社会に於ては、対外的に世界革命に向けての労働者階級の組織化と対内的には目的意識的な過渡政策を駆使しなければならない。スターリン主義とは、この過渡期に発生した一国社会主義を媒介とした共産主義運動の疎外形態（革命主体の変質）であらうと思います。「一国社会主義」を採るスターリンは、ソヴェトの現状（商品経済の残存）との矛盾の中で、「価値法則は、……資本主義以前にも存在したし、資本主義が打倒されたのちにも、たとえばわが国では、商品生産と同じように存在し

つづけている。」として、価値法則は「資本主義的生産の本質」を規定するものではないとして、マルクス経済学を骨ぬきにしてしまつた。(「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」) 価値法則は「資本主義的生産の本質」である。スターリン主義は「個人的対立」を止揚していないからだ、という単純なものではないと思われます。又このロシア革命によつて切り拓かれた過渡期の想定は「二段階戦略」などではないと思います。さら

に「革命の立場」を放棄して「人間関係」の変革による「自己変革」を幻想起しては、スターリン以下になつてしまつでしょう。ハンガリーやチエコ問題でスターリン主義が崩壊したからといって、すぐ「人間的結合」等のコトバに譲歩するようでは「マルクス主義」とは言わない方がよいでしょう。

ひとつひとつ挙げて批判しては紙面を使い過ぎるので、ここで終りますが、最後にこの「半セクト」君は、マルクスの「私の研究は法律関係ならびに国家形態なるものは、それ自身によつて理解されるものではなく、むしろそれは、物質的の生活関係——これの総和は、ヘーゲルが十八世紀における英仏人の先從に倣つて「ブルジョア社会」なる名称の下に包括せしところのもの——に根柢を有するものだということ、しかもこのブルジョア社会の解剖は、これを経済学のうちに求むべきものだということ、の結論に達した」この意義をとらえ、新「理論」からを解放することとに努力するのが良いのではないだろうか。

追記

初めて、こんなことを書いてみました。生活が生活なもので

すから、舌足らずの所があると思います。毎日同一の獄中で斗つてゐる者同志で「批判」し合うのはやめようかと思いましたが、「精神の安定を欠く事に」なりそなうなので書いた次第です。尚、日夜頑張つていられる発刊委員会の学友には感謝しています。頑張つて下さい。



「獄中書簡集」、一週間休刊とした。休みなどない獄中の諸君、そして不斷に斗い抜いている諸君にお詫びをするとともに、再度われわれは諸君とのより一層強固な団結をかちとるべく、全ゆる努力をおしますに最後の最後までやり抜くことを表明する。

統一公判を貫徹しよう！ 分離公判粉碎！ 11月佐藤訪米実力阻止！

70年安保粉碎！

ちよつと旅にでる。バスが白樺のなかをゆづくりと駆ける。前が開け、バスは湖のそばに横づけになる。

湖上を渡る風は冷たく快良い。太陽はさんさんと輝く。緑が暖かく突びこんでくる。緑の圧倒するような匂い、一瞬皮膚呼吸を開始する思い。綿アメ、甘い綿アメになりそうな『やわらかい雲』が流れる。ぼくは頂上にいる。雲の軽そうな影が地上をゆづくりと走るのが手にとつてみえる。

花が、ヤマユリが笹原の中に一輪咲いている。ぼくはリフトにのつてその上を通りすぎる。

タケシマユリの花粉で
つけ。

水辺のベンチに横に
んだ青空が突び込む。

ランシーヌの場合、

編集後記

くしやみをした男がいた

なる。空をながめる。澄
ジュークボックスは『フ
を流している。

ホントのことを云つたら／オリコウになれない／ホントのことを云つたら／あまりにも悲し
い。

唄は風にのつて気持よく流れる。

* * * * * * * * * * *
* ふと太陽が雲にかかる。風が急に寒くなる。ぼくはからだを縮める。
* 発第 *
* 連絡先 * 子供達が無邪気にスイカ割りをやつている。むつちりと熟した赤いス
* 行七 * イカが飛び散る。
* 東大委員者号 * エエイ、何を云つてるんだ。ぼくは獄中の同志達にこの涼しさをホン
* 電追話分文長『八月 * トはプレゼントしたいんだ。
* 審察内区内行中十 *
* 八真一丘加簡日 *
* 崎二の藤発刊 *
* 猛三二二の委員会 *
* 六哲七八郎会 *
* * * * * * * * * * *
< 影丸 >